



狂言綺語

烏亭馬馬著  
全

13  
1867  
1



3  
1867  
1

13  
1867  
1-2

13  
2841  
備合

卷三

叙

去年は妻が辰の今月をくくく見。  
名め、押入鳥其公箱六千の賀延を  
江戸の花かんたつどのみい廿八。親、赤  
友がたを法くく。宴を設くく。鳴  
法くくをなま威守あまも。此頃式亭  
のま山冊を由くく。くくくくくく  
是なん馬馬解乃年賀の時。延平

つゝある。雅人等が朗々々々讀あけける  
文章あり。三馬さうりくさん。きき聞み  
あつてさうさつめ。他日授合新茶序に  
翁さうりく書さうりく。新茶序のり上  
そまかえ。狂言締語と題果し。かゝれ  
てまじし冊となれ。又上本乃慾心を生次  
先生より手病も伏す。年賀乃席も  
除めつて。さうりくおふく。懺悔とて。先生

上席ノ一

のて言あまゆえ。了ん中ん審治つて  
悪りれが用力の飛入サ之指のスケ。是れ  
てまじし立たさうりく。姑くやさうりく  
あん。研めらひいれど。錦心繡の  
ん。心カ智巧を注ぐ。あ  
あ。今更何さうりく。推敷あれが  
本所の親玉。本卦さうりく。の六十  
淡洲橋乃階の。一から段より踏始す。

子歳の域を踏んずる。我亦清ふ  
 子年を毛頭あき道。学々之。漢文の  
 出。後進。誤々まゝとる。志々々。

甲子の春

風来山人述

古人風来  
 戲作正統

狂言綺語

目錄

鳥亭馬馬著

國姓爺御料理報條	市川團十郎煎餅報條
江戸の花御煙草報條	日本一の君とんとん報條
白酒乃せりぬ報條	回大蒲焼報條
番平御料理報條	回即席料理報條
今賀八の字尽れ文	
附餘 談洲樓馬馬六十初度と壽く狂文	
牛門毎名子一章 山東庵京傳日 苟藥亭長根日	
秋長堂物梁日 吾友軒米人日 牛門毎名子 談洲樓乃記日	
四方歌垣真顔六の字はくしの文	

戲場訓蒙圖彙

先年出板仕仕 式亭三馬作  
全部五冊 勝川春英  
歌川豊國画

日本昔の滑稽言のほのほの神代の御優り今  
うきうきと申すを考へて申すは式亭三馬の道長  
大志のけのあつたの西の橋よりいへば  
くづらあつてあつたの西の橋よりいへば  
二州の國本とて天の地理を本を三門の部を  
修を如く傍をわきまをわきまをわきまを  
そのあつたの西の橋よりいへば

戲場實語教狂言盡

大本全一冊  
来春出来  
三馬作

國姓爺御料理報條

立川談洲樓

鳥亭焉馬述

二角板の行燈料理をいへばと云ひて人をして  
おもふるなりと云ふや。さういふ大日本紀の國長  
卓とていふ名あり。元は一統ハ日本の物なり。士  
料理店屋  
所産察とていふなり。系や羊に冷あつて我  
の料理とて法人にせしむる。加有味の太菜小  
くらものおもしろい。名家の工夫をいへばお  
に弘らう。此は新製衣あつて唐と日本を分けて味  
漢豚卓

とみげあ。御料程着上中の。謀る足が和厚肉ちり。虫段  
ハ三ツ文とていふまじふく。大葉小葉とも小六椀は飯酒公相  
派一机よ付拾ふづてうと只今の銭お湯らう一貫文とてひり  
當りややの千里が野色の猛虎も界思より伊勢の神徳大  
麻の御被より。此客人梅のゆきひのありがごとくおさふて  
中へ以上

江戶市川團十郎煎餅 烏亭焉馬述

せりぬ口上

拙者親玉とやハ居宅とて川てむふ裏成因を七たろ  
白糖ちりごろ牛馬へ隠居つたれ。今の将古代目三升とや  
生長より大評判にあづりまとも。世園千馬の名をひり侍  
高化役者の根えはむのさほつた扱。私をも何年あやう  
う。此及堺所北側は普清の。所並でござしを八方が八ッ  
棟表が三の持玉堂造りよんあうゆせぬう。かんなん小三升と  
鯉の流のりつれ紋をひりひりして系思とて一の名代でござる。  
近年世をんぶんで賣はつらうとやうあつてうどんのおとよ

とまがく福の夫小悪さうとく人親玉菓子の二升せんご  
 かし似たるるなんやせむ市川と十串せんごんといふ一とんの  
 見世をうつイヤられあうう廣さらうやても四存あん方山の金え  
 平ら糖の丸吞ちし川焼まいせんごんうりけてまあれさひと  
 廿目ふらもふむんとうらうむんとう番も立ちてもあらぬらいと  
 うしももや買ひまきてうま買れてまさらあまいし砂糖のらう  
 わり上でんごん紋の三升ハ滝のぐらおはに買人あらふに朝  
 からも晩まても一時際あらぬ結折折菓子をうりお茶子を血

上ノ二

けらとて限ちきせい山林入店をけんの獵人と落雁とうらう  
 今こ度の新菓子をうりのおららいく狐の三つの友と外は出  
 一月雪花あれ何の鼻をかえて親玉と呼ばつとりいといふ  
 うゆ子這入りいら返してんべんの市評判ゆなあんといふ  
 じまいまくうゆむいさあらく見世おせく兵衛とうらうぐ  
 杯の酒蔭をうりて右と左の両芝居櫓を敷のどんといふ  
 ぐらうう今日は出の見物へもあげねばあらぬあらぬねば  
 けらとてぐらうう大汗まりて大せんごんとやしあらううもあらず

くらんあれとわらうやまらつて評むんぐ

回風江戸花御烟草入

御披露のせうぬ

鳥亭馬馬述

九青就右白虎前朱雀後玄武四神相應四里四方珍花の  
去地のまにに見世を居る煙草屋が風流仕出しの烟草入寒紅  
梅の咲くけて花のお江戸の市川の豊原と頭も鳥帽子襟材の  
薫の三升の袖袂いさる櫛形のうおおて八千や又まかみ付て  
十八とんナト安以下やごらうゆめりまよりいろくおのこも次

上ノ三

萌茨ハ千代を松の色四海浪も治りし是青漆  
のまろしん供又紙の強いのら金ち昂小所が朱塗乃  
色細が鬼棟朝は奈示が其ののの蝦夷まがひ質ぬ所が  
園ナ昂と神で現金うけ給あり。正礼月香花のも  
と野がけ山終山提もくく入新板志ん製新橋の肉三  
味れ紋看板赤々鳥居千早振紙多すく入の山披露  
くあり敬曰

新製 日本一の君園子報條 鳥亭馬馬述



むりくちびとむらうが救合のうとありよんまきびんごん  
枕をゆが鬼が鳴への門出のこやや二つ下されお付とや猿雉  
子女と三千とせよあつふ枕や梅橋花より園子けけし付世  
交新製家愛弘中いふ多あまうらび以詞可多下い必むいや  
物よあび仁義禮智信の五つは市ある牛の串まう君子  
の徳の園の風めくあふぎとてとる焼園子ハむいおらう今  
の世小千とんごの大明神福徳いのちり神千早ふる卯月  
ハハ新書の鼻くも園子ハハのまのし色とあハ赤園

上ノ四

子ハいと分のワヤびとらるこつ園子のてらんハねまんぢ  
も是とそおつれささう川のふの十園子とら大通も洒落  
ふさい角所のだんご白右野小石をあげやがとまらぬ  
てゆんちとらおらんのもの内中洲あうら園子あま  
大川可越て今君まると称次ものまをれさるそのごん  
さぐとらひるが溝神川越てやいこかとおわえとる園  
子の吐冷人のゆみか方おとらりあ孫教の玉一す八かの  
は幸さるもあふんぶんごんて救もつら志のつら園子の中か

かげろ周子よりひらきし地ろろどろろとて周よりつど  
や下の日行の雨よんごさんごさるるやまろ。まろの中よまきび  
んこの落必や口命も今ひびろよあつ坂やこのよじ  
りやさおりて赤い瓜君よふ書ろえろ。赤い川竹の皮は  
まろひお詰はもん日の中ろろ。日本一の契情空子お求か  
まろ大徳位門あ土も例はひやろむん。向ひいろけろ  
ちハ喰をぬ國のよふろまひまのよ。敬て周子く

白酒の世利譜

鳥亭馬馬述

美酒の魏名白酒清酒と聖人ろ濁酒と賢人ろ酒を  
聖賢とつ小練酒我朝神代のむろ天は岩戸小神ろとを  
あ八百美の神ろ岩戸のおふろカ雄戸隠持女猿田彦  
酒ともあけの玉垣に酒宮あ瓜儀神ふと奏は時小岩戸  
と少しらけ面白酒と酒落のよろろはららの物ろろ。思  
は伊勢と三輪乃神門あ枚の酒をろ。所因縁と白酒  
と白乐天がろろも。金作子儀が吞でひあかの巻小かり  
白酒帯に似て情まの練酒謙の武帝れ酒香ふろ。

あゝ酒と竊しん東方柳が利屈呑つるのハあゝ白  
のぶくけりる川とくく人四十七杯のさる由らみ  
呉の街とわ名も高きとる富士の白酒まるりかの  
あげまんの助六の白酒賣の箱吾諸を借金とて  
とく古風ハ今ふ花見月生ハ武家も賄が家も九重  
白の花もせんよりかうくむあざらハ女雛男雛の  
中におつるよりわりのよや世の中。廣さお江戸のあ  
この白酒より多風味をよほくして下直に商ひ其

星と迷くくく人酒あまもちよかの倭のあわ  
くええまきね戯言の言志んんぼしも極利  
効たらんでありも形さるが大の徳と隣の家かど  
るく。筋向の白酒をとあれ他人の下戸の口  
いぬゆやみ評判く。

江戸前大蒲焼報條 烏多馬馬述

鱧の骨ころあうくくも是き味ひる人鱧の筋かど  
とくくもや社をさる骨あうくく魚を利ねとるゆ世程

みおかどいざれば活る君が代のこころを清く大川も江  
戸かの奥ありとらふまのありしがうららみして世  
よのくらくた名をとてども沙黄の色の玉とくらみ袖  
が浦のあかこの心をせしむるはぶ山掛のころあき中に  
小串りうあつく茶づけのさるや一升酒の友とありしに  
うらぎらびとのよのよをせしむるはぶ山掛のころあ  
引く白ひ門よらんてゆさの人も咽をあつと風  
は君子の徳ありと一巻一本もふらあつた天つものわらん

言ふ氣がむくゆる。血よあぐらう中串とらんては枝と夏  
はあつちあつちとや水清もよらんてけつもの價と惜  
まづ珠小松江の鱸も此味もらわらんてさる大坂  
をのあつちと較年纏とあつちと旅と江とをりつて  
る者婆が醫王樹をさるひまむしとくおらん人の密松と  
るがどしとこみ蒲鏡のこころをさるは戸のねをあら  
かして三升の目ととちとららんて門あふ市川とるは  
つもあつちと外やおよそ氷あふの節とるは音齊の

栢葉ハクエフとわらうことな。今ふとるをぬあものくら。節とらふ  
うさの各見世次第は徳ありてだんと愛うせめ人や

日本橋三丁目中よりす  
大阪をきき清

恭平御料理報條

鳥も馬馬述

叱憚 私もとうり江戸のうまれまじりくべ利根川の鯉の  
料注がよろらうと且那流のあらしやゆ人見世出しい処  
わうもる般かんがう命いのちあううい仕合なななま鯉こいはてんぶかし  
て出世とくと物あらうのたまうゆ人見世二階の善清ぜんせい天井てんじやうまで

あししくうう。大ききううのやままやまとさかみとさ友小うさ  
いつてどひ村でもさし人ひと種たねよわぬ公こうをわふさななあ  
とううくも十月亥の子こ時ときから玄げん花はなりくりととううささり  
楓かえととりりに新宅見世用しんたくみせよう 姥おばのの戸と合あ席せき料りやうだだとと外そとえ  
てもお好次こうじ事ことだだといいととううささううふふううたたるる春はる迄までとと  
といいせせううががああいいけんけんすすまま小こささううけけららああたたひひむむぶぶづ  
ああががああのの綱なまももままららああののままちちももううららああののままちちをを考かんええ  
つつびびくく鯨せい鯨せい鞍あん録ろくええびびああららががせせううぬぬととアアわわりりくくののささ



由安ふぬ若造くふりても目ふくぬ所もあらぬ川小  
 青賣の是成が後流の意場の世話ならぬ廊かーかま  
 倉海老屋と親玉くくく松魚のえびり奥杜柄の  
 暖屋は鯨魚のそん比目魚の家のおな刀魚はとりが鱈紋  
 ば免られ鯉の節限赤鱗赤貝我身がくも鯛つけり  
 ぬ小鱈あけり足まぐくの芝青どれくおまるといふ鱈  
 梢の入道鯨養世より何れ茂極へて引きと希ふ市川  
 申川出出の鯉形改新門ちりびくくその門まゝの唐海月

上八十

骨小蛇のめで鯛むらぬ周の正月節鯨江河のうろく  
 びあるびむくくび。お月形見世よりおひは國幸所  
 三丁目八百八所の世評判とや敬白

本所三丁あまの  
海老屋

ところ中より人のませむくくかいらひて寝る  
 海老屋と付くく人いふくくやせぬくあふらむび  
 のいろあふらむせぬれが赤やの娘ふ一丁目よりくく  
 祝して。

市川五代  
 白猿我出





八目よ述<sup>り</sup>つゝのまゝ

立川談洲樓  
鳥亭馬馬作

狂言綺語尾

上ノ十二

附録

賀談洲樓耳順

東都諸名家狂文

康對山を二千の髪子、名妓百人をよそ  
百年の歌を唱へ、免喜徳園を六旬の宴  
みづぶくに五人とわがしら下も、任氏姉妹の二  
枚と賞をもとの橋街、柳指の歌妓、晋馬  
さんと志くごりものか、今歳三弦乃年よ  
順く高野六千の美女、年々も伯玉六十  
あそ年々よ化し、清浦六十九あそ尚齒  
會の催主をも老く日をもく、さるるはるか

上十三

しも甲くよ新す人、さるるあありにあ  
らよあれと。

本牛乃道、そよけき  
さよき、のいんぐ本所よ  
志茂あゆまげき

右

牛門  
安名子戲主

後洲橋先生六十神慶と書く紙文

相分書四方志願

りく年代記を印し甲子と録る菟者  
高好記とく年報とく先と竹  
六十神慶の賀遠哉とく先と竹  
そもく竹先生を客密評刺記の巻記を正  
樂の親分めとくんと重安の如くも  
石断の如く一尺同屋仮名多本の清量も

是とく二名とくつとく形とく紙又紙作の親と  
之通鏡論の函の家とく茶の根五郎  
茶も少まで一首れ竹一筆の唐唐をつ  
くるとく上とく耳順とく一とく紙作  
茶歳のいとく一とく祝とく我もとく古紙  
彼紙とくれとくまうとく契情道中記の記  
案内とくのとく海とく一とく中とく福内  
鬼外とく八とく字とく一とく我先生の百とく字の紙文

よまあひくういさふお六乃才をぐけらる六のま  
あしれきらむわんしんくくくくくくくくくくくあ  
くくそのくくくくくくく。

夫天ふ六星あり地ふ六土あり物して六十條あり  
ふくむを六松よ業く六十四卦を易代の龜よりくく  
六逸の賢士を竹の林よ接び六人の山依酒れ  
よ飲むを六大物よ六具大六具あまらばくくくく  
ま六花乃侍人我用也六孫王八孫家れ桂梁六

侍を武門乃仕士六くくく未廣の傘を高  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
乃六君子名はありくく古今の六歌他くくく六の  
字を以て六合れくくくくくくくくくくくくくく  
くく六術よまらるるもの文事よ和漢の六國志を  
くくめくくくくくく六体のむかひと角くくく六家  
くくくくくくくくくく侍くく六綱のかくくくくく  
六事のむねとさくくくく物の六玉琴乃六組

ハツクもさうみまよ六城と多し画六法と彩を武  
備ゆら六備府の大カと佩を六村の弓とつら六  
軍れ先と粒布子美の六堂細川乃六條と越え  
とらともがくをさうらめ六書六教の能六穀六  
欣の用ををそんと六尺桶乃底を標る六板屋  
風れおとらぬ祿ばら里が演れいをもよひつる  
六玉川乃あがきささるよとゆるとあぶるぶと  
とども六季移のて物仲方就作者れ照と見え

くむん時と六文ぬけとら沙法めしてまの空を傑  
よあつびを平樂の中とらと六十一と部の納を  
よりもさく親玉の大小と六千万人のおれよりも  
あつとらりき六州流りよおくれとらせんとの滑る  
六文抄の軍記と務り六板肩のと先よりも四つ  
のあき扱うしてよとら中六天れ磨もも拵とめ  
へつら道六種もおとらひと解くふらと酒蒸  
どんがあんどた教のむとら真よ入とらありとど



まらあふれる人もあつた人——それと六情よく  
納めて六根清浄うらやみ多し六十二宮各神をよ  
世家をもちり六百萬色の摩訶波羅蜜をんて六親の  
やうに幸ひを降さされまきのうらむらの花を  
ぐさし風をまげりお朝の六つう暮るまで今日れ  
晝合ふふ六をうさおろくよ居るがれてたの  
との声振るう宿る婚姻の六れとのひて六の  
奥の親まうらある子と儲くくええうう是す

て恥ぢてあて慈ひあつていざこれと祝せさむ  
よ六の吉報たる六の殿とてそのあつてを分ちるよ六の  
つるう中う又とめて六十目とある小判とてよと  
——らぬ顔の猫の目も六をう——てかくることなし  
不寒不崩南山の妻とて六をう六盃棧場六妻  
町の表門よ世を避——東方朝六朝町の表門よ  
情とてうる業を煮るもこの西王母のめであの祝栗山人  
村最なる馬馬先けの若けと老とてやむべし

ふまゝのひより下したの考まが文ぶをびとまらして京を  
の二階ふたかいよう位いれのんどねんの業生しやうは方の美顔  
赤あかくくれのがは

六の字む半はん八はちとりくく世よをらつた後のち半はん八はちの

四よ雙ふたれの神かみ我われもまくくてまさに世よに一つし

よのまえん

四よ赤あか余あまらく水みづのまとまらしるよふふ六む十じゅう

立た流ながるる米こめれれもうららいい

戯あそ場ばれるうう亭ていて後洲しゅう橋はし五ご人にんと

ししりり辞じ

若わ菜さい亭ていをら根ね

鳥かの不啼あま日ひらあれど戯あそ場ばと不慕まるるうう故ゆ亭てい

と鳥亭ていといひ飯と不炊た日ひあれと三升しょうと不慕ま

るうあら故ゆ橋はしと後洲しゅうと白石はく嘶しの七目なな橋はしおと

帰かへりて方は年ねん樂らくの二卷まき切き落おと致書しよと吉の四仕し掛かけ子こ

落お流ながるる乃の具ぐ立たと列れるうう多たふとて口の拍子はくし幕まくら

又また和わ守しの大刀たいおととる者もの解と名なと大鼓たい櫓ろう乃の



高く客をきき<sup>かま</sup>い<sup>め</sup>辨<sup>わか</sup>年<sup>とし</sup>機<sup>はり</sup>末<sup>すえ</sup>のきく<sup>き</sup>聞<sup>き</sup>申<sup>まを</sup>先<sup>ま</sup>て<sup>は</sup>言<sup>こと</sup>仕<sup>し</sup>之<sup>の</sup>流<sup>なが</sup>を  
慶<sup>うら</sup>子<sup>こ</sup>よ<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>べ</sup>く<sup>く</sup>徳<sup>とく</sup>て<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>く<sup>く</sup>蹟<sup>あと</sup>る<sup>を</sup>徳<sup>とく</sup>と<sup>と</sup>白<sup>しろ</sup>猿<sup>さる</sup>よ<sup>う</sup>を  
ぐ<sup>ぐ</sup>べ<sup>べ</sup>ー<sup>ー</sup>耳<sup>みみ</sup>順<sup>の</sup>年<sup>とし</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>て<sup>て</sup>鼻<sup>はな</sup>を<sup>を</sup>愛<sup>あい</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>情<sup>なさけ</sup>深<sup>こ</sup>く  
大小<sup>おほい</sup>又<sup>また</sup>市<sup>いち</sup>川<sup>がわ</sup>の浪<sup>なみ</sup>と<sup>と</sup>揚<sup>あ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>眼<sup>まなこ</sup>を<sup>を</sup>心<sup>こころ</sup>春<sup>はる</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>て<sup>て</sup>舌<sup>した</sup>と  
弄<sup>あそ</sup>術<sup>ぶつ</sup>を<sup>を</sup>み<sup>み</sup>堅<sup>か</sup>板<sup>いた</sup>よ<sup>よ</sup>水<sup>みづ</sup>は<sup>は</sup>合<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>水<sup>みづ</sup>と<sup>と</sup>流<sup>なが</sup>を<sup>を</sup>今<sup>いま</sup>年<sup>とし</sup>享<sup>あ</sup>  
和<sup>わ</sup>癸<sup>み</sup>亥<sup>がい</sup>二<sup>に</sup>支<sup>し</sup>目<sup>め</sup>の<sup>の</sup>正<sup>せい</sup>月<sup>げつ</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>め<sup>め</sup>つ<sup>つ</sup>り<sup>り</sup>後<sup>ご</sup>者<sup>しや</sup>の<sup>の</sup>京<sup>きやう</sup>を<sup>を</sup>の<sup>の</sup>橋<sup>はし</sup>  
小<sup>こ</sup>旗<sup>はた</sup>の<sup>の</sup>迄<sup>いた</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>きて<sup>て</sup>見<sup>み</sup>屋<sup>や</sup>連<sup>れん</sup>中<sup>ちゆう</sup>と<sup>と</sup>今<sup>いま</sup>人<sup>ひと</sup>門<sup>かど</sup>よ<sup>よ</sup>大<sup>おほ</sup>入<sup>い</sup>  
礼<sup>らい</sup>と<sup>と</sup>揚<sup>あ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>人<sup>ひと</sup>ハ<sup>ハ</sup>張<sup>はり</sup>勢<sup>せい</sup>の<sup>の</sup>山<sup>やま</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>せ<sup>せ</sup>う<sup>う</sup>お<sup>お</sup>向<sup>むか</sup>小<sup>こ</sup>女<sup>よめ</sup>形<sup>がた</sup>の<sup>の</sup>酒<sup>さけ</sup>を<sup>を</sup>

上ノ二十

く<sup>く</sup>ら<sup>ら</sup>舞<sup>ま</sup>臺<sup>たい</sup>よ<sup>よ</sup>土<sup>つち</sup>語<sup>ご</sup>の<sup>の</sup>序<sup>しよ</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>く<sup>く</sup>観<sup>かん</sup>蓋<sup>がい</sup>の<sup>の</sup>並<sup>なら</sup>大<sup>おほ</sup>名<sup>な</sup>  
客<sup>きやく</sup>を<sup>を</sup>む<sup>む</sup>久<sup>く</sup>人<sup>にん</sup>衆<sup>しゆう</sup>者<sup>しや</sup>の<sup>の</sup>赤<sup>あか</sup>顔<sup>がん</sup>酒<sup>さけ</sup>と<sup>と</sup>む<sup>む</sup>幕<sup>まく</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>狂<sup>きやう</sup>を<sup>を</sup>  
聞<sup>き</sup>て<sup>て</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>小<sup>こ</sup>百<sup>ひゃく</sup>年<sup>ねん</sup>の<sup>の</sup>齡<sup>ねい</sup>を<sup>を</sup>の<sup>の</sup>べ<sup>べ</sup>ん<sup>ん</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>友<sup>とも</sup>酒<sup>さけ</sup>よ<sup>よ</sup>あ<sup>あ</sup>て<sup>て</sup>何<sup>なに</sup>  
十<sup>じゅう</sup>秋<sup>しゅう</sup>樂<sup>らく</sup>と<sup>と</sup>勢<sup>せい</sup>よ<sup>よ</sup>。

千<sup>せん</sup>代<sup>だい</sup>の<sup>の</sup>一<sup>いつ</sup>ま<sup>ま</sup>君<sup>きみ</sup>の<sup>の</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>く<sup>く</sup>ひ<sup>ひ</sup>め<sup>め</sup>あ<sup>あ</sup>て<sup>て</sup>少<sup>すく</sup>し  
え<sup>え</sup>つ<sup>つ</sup>け<sup>け</sup>柱<sup>はしら</sup>の<sup>の</sup>松<sup>まつ</sup>と<sup>と</sup>さ<sup>さ</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>也<sup>なり</sup>

後<sup>ご</sup>洲<sup>しゅう</sup>橋<sup>はし</sup>よ<sup>よ</sup>人<sup>ひと</sup>年<sup>とし</sup>賀<sup>が</sup>序<sup>しよ</sup>

吾<sup>われ</sup>友<sup>とも</sup>新<sup>あらた</sup>

酒<sup>さけ</sup>月<sup>つき</sup>米<sup>こめ</sup>人<sup>ひと</sup>

ひ<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup>れ<sup>れ</sup>大<sup>おほ</sup>幼<sup>こ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>字<sup>じ</sup>治<sup>ち</sup>川<sup>がわ</sup>よ<sup>よ</sup>吐<sup>つ</sup>寄<sup>き</sup>人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>亭<sup>てい</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>け<sup>け</sup>今<sup>いま</sup>



とよみはなほ川に雲ありのけつめぞ雲を延とく梅人  
もよみはなほ川に雲ありのけつめぞ雲を延とく梅人  
とよみはなほ川に雲ありのけつめぞ雲を延とく梅人  
とよみはなほ川に雲ありのけつめぞ雲を延とく梅人  
とよみはなほ川に雲ありのけつめぞ雲を延とく梅人  
とよみはなほ川に雲ありのけつめぞ雲を延とく梅人  
とよみはなほ川に雲ありのけつめぞ雲を延とく梅人  
とよみはなほ川に雲ありのけつめぞ雲を延とく梅人  
とよみはなほ川に雲ありのけつめぞ雲を延とく梅人  
とよみはなほ川に雲ありのけつめぞ雲を延とく梅人

着水れ彩もあつていささか川

二重ゆがむとあるうらふ二月

秋長堂  
河井物梁

ち平床のまき<sup>あんごど</sup>けり<sup>いそ</sup>登之川のね<sup>ご</sup>こと

ち平床のまき<sup>あんごど</sup>けり<sup>いそ</sup>登之川のね<sup>ご</sup>こと

ち平床のまき<sup>あんごど</sup>けり<sup>いそ</sup>登之川のね<sup>ご</sup>こと

ち平床のまき<sup>あんごど</sup>けり<sup>いそ</sup>登之川のね<sup>ご</sup>こと

ち平床のまき<sup>あんごど</sup>けり<sup>いそ</sup>登之川のね<sup>ご</sup>こと

半<sup>ちびま</sup>ちよ<sup>ちびま</sup>ねの<sup>ちびま</sup>に<sup>ちびま</sup>ね<sup>ちびま</sup>の<sup>ちびま</sup>ま<sup>ちびま</sup>升<sup>ちびま</sup>つ<sup>ちびま</sup>あ<sup>ちびま</sup>ま<sup>ちびま</sup>  
ま<sup>ちびま</sup>や<sup>ちびま</sup>り<sup>ちびま</sup>よ<sup>ちびま</sup>半<sup>ちびま</sup>代<sup>ちびま</sup>れ<sup>ちびま</sup>ね<sup>ちびま</sup>の<sup>ちびま</sup>い<sup>ちびま</sup>魚<sup>ちびま</sup>

談洲樓記

牛門 牛名子述

坂立門の南が是市川よ通下撃と云ふれ相士のま  
 よ後海橋と云ふ屋宇のありていひ世橋よとよまばこ  
 階の高のまよのほらまのむまばくむ橋南町  
 の境狭くは火り卒の末側よりて此のままを  
 又うがごとく鳴呼世橋のままよりあうがり橋の  
 鼻よりらそ船のままらねの申づつまのせ  
 飛浮くまらほまらねのまらうて帆を

くる橋柱小題せしは馬氏まら馬氏  
 ありては面年代記のむしより其名を平記の  
 文殊神とまのぶ小あまの河海のまま  
 とも南が極方妙のまの月心酒力ら茶  
 歌くま牛島の牛のまらあまはまら  
 ままのまらまら松のまらまらまら  
 録のまらまらまら後天れ術彫龍の爽  
 のあづまらまらまらまらまらまら

八宝のくしむ 藤素漢儀 くらやきとくらむ 播磨  
子貢のほね 織きく 夫子のゆく 後持とともも 人  
の言とまぬもの ぶらぶら ぶらぶら ぶらぶら 晋人の清  
淡ぬん 妙の海のまぐー あまー 鳴呼つとも かん

馬馬先生の六句と書く序

山東京傳述

夫戲作と昔をありと種とてよらびの草紙とん 重う  
り 花よ 唱吉切雀水よ まぐむ 裡まて ぶれ 戯作か

ざる 猿蟹合戦 いかううをもの くれどて 白拵とくどじ  
筋れよらうハ 男女の仲をもやらう びやらうらうと 娘は  
猛と 金平れんを あられと ねのら せ 月ふるえんぬ  
鬼神をもぶらうらうら 枕を 島やうけ 戯作とらふ  
この 浪花花うてら 西野より ぐまうて 自笑と 頑  
よ 侍り 大江戸うて 自墜落先せいと ぐらと ぐら  
風来山人に やさうんあり 曲三味線と 親仁 質と 守  
の上よとん りううく 下と 後義と 根か 草の



蓬萊の山よぼらけのぼり東方朔が桃を  
ぬすむ我なりとあり住るの楽を  
たふさうよにむしんとさされぬのしよは  
とやむさうやすとよありこひやあそむの  
相生所の住人西王母の桃栗山人なりと  
なみよふ桃源の舟ありやすたしく  
ちよ六十の翁あり白髮の管ぢやう子供の  
やうよんこゝろいぢももや  
[既九]二番目  
上段二

盤津の浄きうらめやうめしきめか  
泉をよ福福の三びやうく  
そふひこゝちやあひひやめだたのく  
とあひのわらう南山の崩れあふ  
函谷のまめとさうくこの大入まこと  
ありが天威のよき新表の大  
いともの天地の一番戦傷ながく  
りあうりの談洲老人すくすくあ





のしほりてはるるるるるるるるるる  
たごころのあはれは

ち樹園

上段ノ二

